

## 地域情報（県別）

## 【岡山】患者、地域と交流する「のぞみの会」が病院の背骨-高尾聡一郎・倉敷平成病院理事長に聞く◆Vol.2

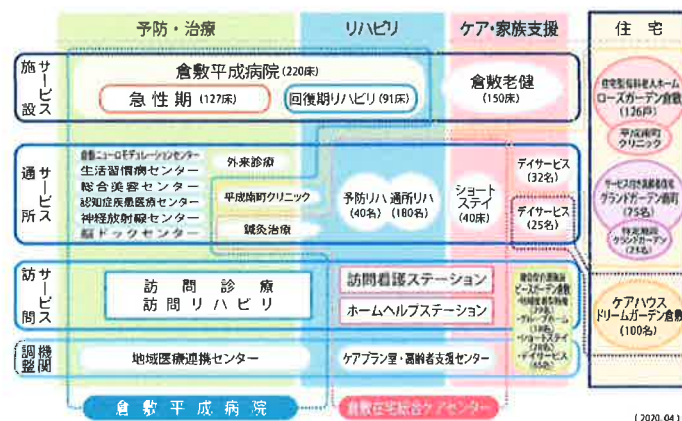
2020年11月16日(金)配信 m3.com地域版

倉敷平成病院（岡山県倉敷市）は、開院から30年を経て、現在では23の診療科目を標榜する総合病院に成長した。「救急から在宅までいついかなる時でも対応します」を理念に掲げ、社会医療法人・社会福祉法人・有限会社の形態で全仁会グループを運営し、地域の声に応えている。患者本位の医療に徹する病院運営と医業承継について、2代目理事長・高尾聡一郎氏に聞いた。（2020年9月18日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

## ——理念を実現するために開院当初から運営していた介護事業について教えてください。

1988年に、前身である「高尾病院」の開院と同時期に、介護老人保健施設「倉敷老健」を開設しました。その後、軽費老人ホーム（ケアハウス）、複合型介護施設、住宅型有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅など、さまざまなタイプの介護施設を開設してきました。入所系の施設だけでなく、24時間365日の在宅支援サービスを行っている倉敷在宅総合ケアセンターもあります。トータルヘルスケアの考え方に基づいて、倉敷平成病院での診療に引き続き、われわれが最後まで患者さんのサポートができるように整備しています。脳卒中で当院に救急搬送され、手術後、院内のリハビリで回復し、その後、在宅支援サービスを利用してリハビリを続けている患者さんなどがいらっしゃいます。



全仁会グループで取り組むトータルヘルスケアの仕組み（病院提供）

今後どのような施設やサービスを作っていくかは、地域の人たちにとって、今、足りないものは何かという視点に立って考えなければなりません。例えば、今は重度の要介護者が増えています。特別養護老人ホームへの入居を待っている方が多く、そこは整備しなければなりません。しかし、参入するには市の認可が必要です。倉敷市は現在第8期の介護保険計画を策定中で、私自身も委員として参画しています。地域の方々が医療に関して困っていて、全仁会の組織にできることがあるとしたら、新たな医療への取り組みを形にしていきたいと思っています。



住宅型有料老人ホーム・ローズガーデン倉敷

——地域や患者の声を大切にするという点では、患者や地域住民、病院スタッフの交流や意見交換の場である「のぞみの会」が重要な役割を果たしていると聞きました。

「のぞみの会」は患者とその家族で作る1000人規模の会ですが、単に当院の医療を紹介したりニーズをキャッチしたりするためだけの会ではありません。当院にとっては、背骨になるような非常に大切な組織です。父が倉敷中央病院に勤務していたころは、脳卒中になると命を落とすか、障害が残ってしまう方が多く、急性期病院を退院した後は患者さんがどのように過ごしているかも把握しにくいという課題もありました。そこで、退院後も安心して暮らせるように患者さんと家族のための会が自然発生的に形成され、それが後押しとなり、高尾病院の設立につながりました。



「第51回のぞみの会」で医療の取り組みを紹介



「のぞみの会」の催しでは地域住民とのふれあいも

のぞみの会では、疾病・予防に関する勉強会やリハビリ作品展、ふれあい広場などを催しており、職員や患者さん、地域の方々との交流の場が生まれています。倉敷平成病院のことを好きになってもらうには、まず知ってもらう

ことが第一歩だと考え、毎回スタッフ総出で準備、運営をし、開催は50回を超えました。

### ——2代目として病院運営を受け継ぐうえで意識したことは何でしょうか。

私は脳神経外科医として他の病院に勤務した後、当院に戻り、2013年に理事長に就任しました。しかし、最初の3年間は自分の考え方をあまり出さないように意識しました。自分のカラーを焦って出して、それまでとやり方が変わってしまうと、組織としてのエネルギーが相当そがれると考えたからです。医療方針にも組織運営自体にも一貫性があり、職員や患者さんが安心できる組織になるには、私のカラーをはじめからあまり強く出さない方がよいと思いました。

医療に限らず円滑に組織を運営し、一体感を出すには、互いに相手のことをおもんばったり、自分の気持ちを伝えたりといった意思疎通はとても大事なことです。私が2007年に当院へ着任したとき、一番に目に留まったのが、すれ違うときでも職員同士が必ずあいさつをしているということでした。これはできるようでできないコミュニケーションの第一歩で、そういうことが自然にできる病院、そして父は偉大だなと思いました。

職員個々の目標はそれぞれありますが、組織として同じ方向へ向かっていけるようにリーダーシップを発揮していきたいです。「あの病院は、みんな同じ気持ちで医療や介護を届ける気構えがあるよ」と言われるのが一番の誉れですね。どうしたらそうなれるか、常に考えています。これは言うのは簡単ですが、とても難しいことで、理想とする病院の風土、信念が継承され、年長者が次の若い職員に医療・介護の技術はもちろん、組織の誇りを持って考え方を伝えていけるような組織になりたいですね。

### ——新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のような新たな局面や高齢化など、医療も様変わりしていくと思われませんが、今後の展望をお聞かせください。

当院は、県南西部地域を対象とした救急車搬入件数が年間約2200件あり、市内では3番目に多くなっています。COVID-19に関してはまだ落ち着いていますが、疑わしい場合に備えてマニュアルを作成し、しっかり感染症対策を行ったうえで、他の病気で困っている人が不利益を受けないように対応しています。

今後、ウイルスがまん延してきたらどうするかなど、状況に合わせて考え、医療機関が足並みをそろえていかなければなりません。現在当院では職員の行動規範を緩和して、春から緊張が続いていた職員に気分転換してもらい、冬の感染拡大に備えています。そして、われわれがどう対処すべきかは、開院以来掲げてきた「救急から在宅まで何時いかなる時でも対応します」という理念と、地域の声のもとに考えなければならないと思っています。

このたび、開院30周年記念事業として救急棟の増改築を行い、より多くの患者さんに対応できるよう、設備と医療機器を新たに導入しました。私が当院に戻ってきた13年前に比べると、外来患者数も約1.5倍になっていて、待合室や診察室も拡充しました。新たな環境で今までのやり方を踏襲しながら、質の高い医療をさらに追求していきたいですね。



倉敷平成病院外観

#### ◆高尾 聡一郎（たかお・そういちろう）氏

倉敷平成病院理事長。1998年岡山大学医学部卒業。岡山大学医学部、岡山赤十字病院の脳神経外科勤務を経て、2007年に倉敷平成病院脳神経外科に入職。同病院の前身・高尾病院を開設した父、高尾武男氏から2013年に社会医療法人全仁会の理事長職を引き継いだ。

【取材・文＝内田吉美（写真は全て病院提供）】